第３６回福岡県美しいまちづくり建築賞　受賞作品概要

総評　選考委員長　末廣　香織（九州大学大学院人間環境学研究院 教授）

◆総評

今年で36回目を迎えた本賞には、「住宅の部」21件、「一般建築の部」26件の応募があり、多様な視点を持つ10名の選考委員によって審査が行われました。応募書類による9月の一次審査を経て、9作品が現地審査に進み、リフォーム・リノベーション作品を対象とする(一財)福岡県建築住宅センター理事長賞候補の3作品も現地審査に進みました。現地審査は11月中に行われ、その後の最終審査を経て住宅の部3作品、一般建築の部3作品、理事長賞1作品の受賞が決定しました。例年にも増して非常に優れた作品が多く、受賞作品を選ぶのは困難な作業でした。県内に多くの優れた建築ができあがっていることは、とても喜ばしいと感じています。

「住宅の部」の大賞を受賞した「houseG / shopG」は、街の歴史を伝える旧唐津街道に面した木造の店舗併用住宅です。近隣の生活道路に対して象徴的に開いた大きな開口が、街並みとの関係を作っており、歴史的な町家の姿を現代的に再解釈しています。また、開放的で可変性の高い架構の仕組みが、時代の流れにも対応しやすい柔軟性を持つことも評価されました。優秀賞を受賞した「屋根裏の家」は、屋根裏空間を構成する3層の規則的な木架構グリッドが特徴的です。鉄筋などの斜材や床面を空間内に配置することで、張り出したテラスを含めてバランス良く構造を成立させており、結果として非常に立体的でダイナミックな屋内空間ができあがっています。奨励賞を受賞した「造成と影、あるいは対角と光による家と庭」は、北に向かって傾斜する敷地状況を合理的に解釈して、特徴的な三角形平面と屋根形状を導き、レベル差のある空間構成と庭との関係が魅力的に作られています。現地審査に残った「風路舎」も、非常に美しく完成度の高い優れた住宅でしたが、受賞には一歩及びませんでした。

「一般建築の部」の大賞を受賞した「太宰府天満宮 仮殿」は、歴史ある神社を改修するのに伴って設けられた仮設建築です。大きく傾斜した屋根の上には、周囲の森と同じ木々や梅が植えられ、まるで森の一部が巨大な花器の上に切り取られて、空中に浮遊したような印象を与えています。アプローチからも門の向こうに美しい緑が見え、馴染みのある歴史的な景観を斬新なイメージで鮮やかに刷新したことが高く評価されました。優秀賞を受賞した「鳥飼八幡宮 式年遷宮」もまた、歴史ある神社の建て替えでした。その拝殿には原初の祈りを想像させる巨大な10本の自然石が建てられ、その存在感を際立たせたままに、周囲を取り囲む壁が重厚な祈りの空間を作り上げています。隣に作られた対拝殿は、対比的に軽快で開放的な木の空間です。両者ともに柱という象徴的な祈りの要素を美しく生かした建築となっています。奨励賞の「小石原の事務所」は、山間の街の中心部に立つオフィスです。美しく完成された建築のありかたと、周りの庭園も含めて地域景観の向上に貢献している姿勢が評価されました。現地審査に残った「久留米市中央公園 Park-PFI プロジェクト_KURUMERU」、「福岡市植物園ボタニカルライフスクエア」も周囲の公園との関係がデザインされた非常に優れた建築でしたが、受賞には一歩及びませんでした。

「建築住宅センター理事長賞」を受賞した「PERGOLA HOUSE -時・町並み・公私・暮らしをつなぐ- 」は、木造の古い形式の住宅を現代的でフレキシブルなプランに改修し、隣に増築した小さな事務所との間をテラスとパーゴラでつなぐことで、屋内外の快適な環境をデザインしています。現地審査に残った「川辺の古民家」、「福間のアトリエ -竹にまつわる物語り- 」もそれぞれ魅力的でしたが、受賞には一歩及びませんでした。

住宅の部　大賞
「houseG / shopG」

設計趣旨

古くは漁村として、江戸時代には唐津街道沿いの宿場町として栄えた計画地は近年大規模な建替えが起こっており、海と街道に根ざしたかつての営みは今では見られなかった。しかしその歴史性は「地割」と、減りつつも残る町家や社寺の建ち方にしっかりと記憶されており、変わらぬ構造性としての信頼ができたため、それを建築の質へと置き換えるスタディを進めた。

現れたのは基準モデュールである2,400mmの間口、高さ6,000mm の断面が奥に向かい9 スパン延びる一室空間だ。その道のような質を持つ「がらんどう」の傍ら、基準モデュールの約数600mm を減じながら敷地形状にアジャストしつつその界壁を構造壁とした空間が並走する。上方では金属ブレースを長辺方向に反復配置、短辺断面は上下対角に耐力要素が分布した状態となった。

施主は当初、住まいに加え簡易な飲食業を行う予定だったが、結果的には通りに大きく開かれた鮨屋となった（この移り変わりには驚いた）。しかし彼らにとっては未だ現れていない空間がどのようなものになるかを町の歴史と地続きで実感し、そして引き受けようという気概がその変遷に現れていたようだった。

地域固有の歴史性を軸足に、もう一方は生活の変化に対するしなやかさを備えるあり方。場への信頼と許容性、そしてひとの生き方を後押しする動機となるような建築を目指した。

一般建築の部　大賞
「太宰府天満宮　仮殿」

設計趣旨

太宰府天満宮 124 年ぶりの御本殿大改修工事に際し、その３年の工事期間に設らえられる仮殿。

豊かな自然や天満宮の 1100 年以上の歴史と伝統といった重層性をどう受け止め、つり合い、そして未来につながる形とするか。スタディを重ね、御本殿の大きくて美しい屋根を無視することはできない感覚と、古くから残る伝統や伝説が太宰府天満宮の地にて受け継がれていることに意識を傾け、強い存在である屋根を弱い存在とさせる為に自然の力を借りる「浮かぶ森」のコンセプトが生まれた。

斎場内は、現代的なプロポーションと伝統的な空間が水平線上に広がり、御扉を中心とした祭壇が、森の影の中から印象深く映えることを意識している。内部に近づくとルーバー状の天井が曲面状に現れる。これは御本殿の伝統的な垂木を踏襲しており、斎場内の厳粛な空間へとなめらかに誘う。さらに内部に踏み入ると、斎場の天窓から美しい空と共に森が目に飛び込み、再び天満宮の豊かな自然を体全体で感じることができる。

屋根上の樹木は、太宰府天満宮境内のアイデンティティでもあるクスノキをはじめとする常緑を主体としている。加えて太宰府天満宮の梅林で育てられた梅の木や、花や色彩が季節によって変化する樹種を用いて境内の自然と共に変化する。

住宅の部　優秀賞
「屋根裏の家」

設計趣旨

福岡市早良区の、かつては海岸線だった土地に建つ住宅である。敷地北側には1980年代に造成された埋立地が広がり、南に借景する松林はかつての浜辺の名残だ。施主は若い共働きの夫婦で、眺めの良いワークプレイスと開放的な吹抜け、大きな収納を希望した。コロナ禍によって住宅のあり方が見直される中、単に書斎や収納をつくるのではなく、生活と仕事が混じり合い、未来の変化に柔軟に対応できる空間をつくりたいと考えた。そこで、LDK の上に大きな屋根を架け、巨大な余白として屋根裏の空間を浮かべることを思いついた。職と住が分離されたのは近代以降のこと。それまでの民家では仕事と生活は当たり前のように同居しており、屋根裏は手仕事や養蚕に使われ、納戸でもあった。このような屋根裏をアップデートして現代的なモノとコトを収め、将来の拡張可能性をも担保する持続可能性を考慮したアイデアだ。

一般建築の部　優秀賞
「鳥飼八幡宮 式年遷宮」

設計趣旨

鳥飼八幡宮は弥生時代に起源をもつ。本計画は江戸時代に建立した本殿拝殿の建て替えとその間に使用する仮宮の新設である。地域の繋がりや氏子意識が薄れゆく風潮の中で、歴史と伝統を踏まえた上で神社を現代に最適化したい。宮司の想いに応えるために境内の整備と全く新しい社殿を計画して再び地域やより広域の人々が集う神社の未来を模索した。

環状列石のような人為的に創られた祈りの場が持つ神聖さを今に再現できないか。石が日時計のように競り立つ磐座の拝殿をイメージした。内部は、薄暗い洞窟に入ったような厳然な空気感を持たせた。四方に開いた岩の裂け目からは節気ごとに異なる光が差し込む。外部は原始的な建材のススキで葺いた。膨大な手仕事の集積が馴染みやすい表情をつくりながら断熱を兼ね、躯体を塩害から護っている。本殿は高床板倉の神明造として、最も古いとされる神社建築様式を参照している。

造営中に使用する仮宮は拝殿とは対照的に、光の溢れる簡素な架構による木造の空間とした。遷宮後も常設とするため、境内の見通しを損ねないよう透過度の高いガラスで囲った。

神道では永久と常若の思想があり、常に瑞々しい状態を保ちながらそこに在る永続性が求められる。今後の遷宮では、茅の葺替えを行うことで常若を体現していく。茅壁の柔らかい風景と、普遍の巨石が地域の人びとの依代になることを願っている。

福岡県建築住宅センター理事長賞

（リフォーム・リノベーション）

「PERGOLA HOUSE

–時・町並み・公私・暮らしをつなぐ–」

設計趣旨

本計画は、祖母が一人で暮らす住宅を、子世帯、孫世帯が働きながら住まう建物へ改修する計画である。敷地は八女市前古賀。前古賀では町のコンパクト化や交通網の発達など複合的な理由から人口が増加している傾向にある。現に13年前（平成24年）では184世帯であったが現在は201世帯と17世帯増加している。この数字は小さな集落の景色を変えるには十分な数字である。集落の輪郭が変化し続け自然と調和した風景を失う中で、故郷の魅力を残しながら変化を受け入れていく建築の在り方について考えた。計画地はかつてぶどう棚が広がっていた場所で、「パーゴラ（ぶどう棚）」の原風景を生かし、これを生活と結びつける形で再解釈した。庭と建築を市松状の関係性にすることで、内外が隣り合う配置計画とし、中央に設けたパーゴラは雨や日射を通す木陰のような特徴的な空間を生み出しながら内外を緩やかにつなぎ合わせる。内部改修では、骨格の変更を最小限に抑え室名を入れ替える事で現代の生活に合った居場所の選定を行った。これらの手法により故郷の魅力を残しながら町の変化を受け入れる建築のあり方を実現できたのではないかと思う。